

# 源氏物語の接頭語について

竹田 和子

源氏物語中の接頭語を述べようとするに当つては、まず第一に接頭語自体の一応の規定が必要となる。今諸家の言を総まとめにすると、既知の通りであつて何ら目新しいものではないが、次の様なことが云える。

つまり接頭語とは、「語詞構成要素の一つとして、常に語基の前に冠せられることにより下語を修飾し、比較的独立を持たぬ語」と云う事。私はこの結論を立前として、以下その一部を述べようと思う。

源氏物語接頭語分類の試みは、特に山田孝雄氏の『日本文法論』『日本文法講義』『平安朝文法史』等の著書に於ける接頭語の種類項を参照した。接頭語は機能に応じて二大別出来る。その一つは、単に音調を加えるに過ぎぬとするものと、その二はある種の意義を加えると見るものである。

前者は、これを又二分し①古来発語といわれ、種々の象徴的音節を冠することにより、名詞・動詞・形容詞・副詞などの意義を慣用的に修飾するものと、仮に私が(一)の中の⑥として分類したい一群、⑥いづれも動詞のみを修飾する。動詞から転じて独立を失い、ほとんど意義なく、まゝ語勢を添えたと見るものの、②③に区別する。

源氏物語に於ける(一)に属するものを掲げてみよう。

(一)②

を	み	た	さ	け	か
止む(2)・暗し(2)	山(3)・雪(3)	なれ(1)・ばかり(1)・むけ(2)・むけのかみ(1)・なびく(3)・ばかり(26)・ばかりいだす(1)・ばかりいづ(1)・ばかりなす(1)・ばかりまどひありく(1)・やすし(2)	をし(1)・よ(1)・よなか(2)・よごろも(1)・まよふ(7)	ち□ざやぐ(1)・うとし(4)・おそろし(3)・だかし(45)・ちかし(65)・にくし(3)・どほし(20)・ざやかなり(45)・ちかなり(1)・うとかり(1)・どほげなり(1)	くひ□なぐり(1)・うち□なぐる(1)・ひき□なぐる(2)・なぐる(1) やすし(9)・やすかり(1)・よわし(3)・よわげなり(1)

右表の様に、単に音調を加えるにとどまると思われる接頭語中、他に源氏には全く見られない。

次に⑥、動詞転成の接頭語と考えられるものには、「あひ」「うち」「おし」「かき」等の種類が掲げられる。それらの総数を一応示すと左の通りである。

種類	総数
あひ	63
うち	1366
おし	205
かい	20
かき	175
さし	246
たち	346
とり	325
ひき	461
もて	336
計	3543

以上が、殆んど意義なくまゝ音調を加えるとする接頭語であるが、後者に属するもの、つまり、(一)ある種の意義を加えると見るものは、名詞数詞などの実体語に冠せられ、比較的明瞭な観念内容を示すといわれるものである。その数等は、煩雑になる為割愛するが、種類を一覧してみよう。

二、①敬意を添えるもの。すべて「御」の字音を用いる。

お・おほ・おほみ・おほん・おん・み・ぎよ・こ

②真正又は純粹な意を添えるもの。

す・飾りない意を添える。

き・生来のままの意を添える。

ま・真正の意を添える。

③初めて、又は新たな意を添えるもの。

うひ・縁臉上初めての意を添える。

にひ・新しい意を添える。

はつ・時間的の初めをあらわす。最初の意を添える。

④小さい意或は些少な意を添えるもの。

こ・を

⑤仰而非なる意を添えるもの。

えせ

⑥不正又は非理な意を添えるもの。

ひが・体言特に用言より出たものに多く接す。

⑦打消又は無き意をあらわすもの。

ふ・「不」の字音を用いる。

ぶ・「無」の字音を用いる。

む・「無」の字音を用いる。

⑧性をあらわすもの。

を

⑨不完全ないゝかげんな等の意を表す。

なま・動詞・形容詞・副詞などに附加される

⑩なんとなくの意をあらわすもの。

もの

⑪多くをあらわす意を添えるもの。

もろ  
いく

⑫ことなる意をそえるもの。

こと

ふ。孝。ふ。用  
ぶ。道  
む。才。む。徳

を。しか  
め。お。や

な。ま。は。した。なし

も。の。哀。れ

も。ろ。心  
い。く。世

こ。と。人。等

吉沢義則著「源氏物語」索引及び佐成謙太郎著「対訳源氏物語」を参照に、一応接頭語として摘出したのは右の通りである。さて、源氏の中に於けるこれら接頭語の一項一項に付き詳細にする必要もあろうが、今は二・三項のみにとどめ置く

(イ) 接頭語「み」

一般に接頭語「み」は、「かよわし」・「けざやかなり」・「さをしか」・「たやすし」等に於ける「か」・「け」・「さ」・「た」等と同類のものとして認められてゐることは、先の表に示した事によつても明らかであるが、更に実例に當つてみた結果による一考を述べたい。

山田孝雄氏の「み」に関する説を特に揚げてみよう。

○意義漠然として音調をよくする為に添ふと見ゆるものの例次の如し。

「み」名詞に接す。

み空・み雪・み山・み谷（日本文法講義）

○音調を添ふるものは其の意殆ど認め難く、唯其の下の語意を強くするに過ぎざるものなり。

「み」名詞につく例あり。

み吉野・み熊野・み山・み空・み雪・み坂・み岬

唯語意を強め同時に幾分か感情的に形容する意あるなり。（日本文法論）

○単に声調を整へむが為の「…み…」等は前期には榮えしがこの期よりは慣用語に固定するに至りぬ。「み」は前期に盛なりしが、この期には前期の残存物をみるのみ。（平安朝文法史）

ところで、源氏中の「み」に関する接頭語も、尊敬の意を表する

「みく御」を除いて・み雪三例・み山三例・その他み山おろし(2)・

みやまがくれ(3)・み山木(3)・み山籠り(2)・み山住(4)等がある。

用例を示そう。

み山

(1) 枕ゆふ今宵ばかりの露けさをみ山の苔にくらべざらなむ（若紫）

(2) 雪深きみ山の道は晴れずともなほふみかよへ跡絶えずして（薄雲）

(3) 霰降るみ山の里は朝夕に眺むる空もかきくらしつ（総角）

發語的「み」を冠した山の例はこの三例である。

ところでこの歌を解釈するに當つて「み山」の「み」を、慣用化されもはやその意を持たないところの、単なる語調を整へる接頭語「み」と解する以外に考えようはないだろうか。成程この用例だけからは「み山」(名)「深山」(み、發語)(一)山ト云フニ同ジ(大言海)解釈をしても、一向不思議ではあるまい。しかしこれらの歌が、源氏物語中の前後の文章から推し考へると、積極的ではなくとも、「み」に「深い」意が表わされるのである。

例えば(1)の歌は、源氏がわらはやみ祈禱に北山を訪れた際の、若紫の祖母の源氏への返歌であるが、この北山については「やゝ深く入る所なりけり…三月の晦日なれば京の花盛りは皆過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて入りもておはするままに霞のたたずまひもをかしう」見ゆるところであり、そして「岩隠れの苔の上になみあて土器参る」といつた奥深いところである。

(2)の歌も「かかる深山隠れにては何の榮かあらむ」と、母尼君が嘆く「大堰川のわたり」（都の北効の大堰川の近く）の、「川面に、えもいはぬ松陰に、何のいたはりもなく建てたる寢殿のことそぎたる様もおのづから山里のあはれをみせ」ている明石の邸で、明石姫君と乳母に別れる明石上の、乳母におくる歌である。

更に最後の引用歌は、宇治の中君から匂宮への返歌である。「霰散るみ山の里」は、云うまでもなく宇治の山里であつて、「かく絶え籠りぬる野山の末」として「いとど山重なる御住処に尋ね参る人もな」く、「あやしき下衆など、田舎びたる山賤」どものみ、稀に馴れ参り仕うまつる」宇治である。

以上のように、歌によまれたこれらみ山は場所柄、実に人里離れた奥深いところであることがわかる。

では、「み」自体にそういう表意があつたかどうか、辞書によると「みは発語」奥深き山・奥山・深山・(大言海)み・やま(名)奥深い山。(古語辞典)とあつて、「み」に「深い」意のあること明らかである。とすれば単なる語調を整へる発語としての接頭語ではない。「みし」という形容詞が存在してその語幹であつたらうか。或は「深し」と関連した語根といわれるものであろうか。唯源氏の中だけで云々するのは危険だが、私は一まずこの深山の場合の「み」を、奥深い」という意義を表す接頭語ととりた。その理由は、では「み(深)」が独立語として存在したかを見るに源氏中にはその用例が全くなく、この深山の如く、山に先行することによつて修飾語となり、下語を「奥深い」という意で形容修飾する非独立語と考えるからである。山田氏の分類では、既知のように「み山」は「み空」等と同群に入れて居れるが、私は接頭語分類第二「意義」を添えるとみるものの中の、「奥深い」という具体的な表意接頭語とすべきではないかと思うがどうであらうか。

「み雪」についての三例は次の通りである。

○小塩山みゆき積れる松原に今日ばかりなる跡やなからむ(行幸)

○うちきらし朝曇せしみゆきにはさやかに空の光やは見し(行幸)

○茜さす光は空に曇らぬをなごみゆきに目をきらしけむ(行幸)

右の諸例は、いづれも「行幸」の巻にあつて、「みゆき」に行幸をかけたのであるが、「み雪」というのは歌語ともいえようか。このことは「み」を「深い」という意義保持の接頭語とするかの詮索は一まず預け置く「み山」に於ても、更には「み空」「み谷」にしても、下語を美化する為の語と思われる。つまり同じ語調を整へる接頭語ではあつても、前記の様に用いた「み」は特に「親シミ・又美ムル意」(大言海)の、美称に用いる語であらう。

「み」を附加することによつて美的ニュアンスを醸し出すといった、古代人の造語への関心がうかがえるようである。

万葉時代にあつては「曖昧性を帯びた暗示的表現こそ詩の用語として特に要求」され(註1)、「即ち万葉の語彙にあつては、近代文明語の如く相互に個別化し、一語一語の概念の明確化することよりは、むしろ互に価値的な連絡を保ち合ひ、にほひ合ふ含みを持つた表現こそ、要求せられ(註2) たという事を思い合はすれば、今述べてきた「み雲・み山・み空に於ける「み」にも、そういつた要素が含まれていると思われる。以上「み」について補足した。

#### (四) ほの

源氏物語の接頭語分類の中には入れなかつたが、接頭語とすべきではないかと思われるものが二・三ある。「うら」・「そら」・「ほの」・「故」等であるが、これらは接頭語に入れるとすれば、いづれも分類第二「意義を加ふる」と見る群に属する。その基準には再三繰返すが、語詞構成要素として分解すると非独立語であり、他の一語に先行することによつて初めて職能をあらわして、下の語を修飾するという事を前提としたものである。

「ほの」については大日本国語辞典に

○ほの(仄)副(ほ)ほのかに・かすかに・ちらと(ほ)はかなく・ちよつとの意を解してある。大言海古語辞典共に「ほの」は接頭語と認めている。しかし全ゆる国語学参考文献中接頭語「ほの」を掲げているのは見当たらない。

源氏物語では、「ほの」の総数68、「ほの聞く・ほの暗し・ほの見ゆ・ほの見る」等がある。

今、接頭語として二辞典に認められているのだから比較的強みではあ

るが、橋本進吉氏はこの「ほの」について次の様にいつて居られる。

「この『ほの』は、また『ほのかに』『ほのぐらひ』『ほのぼの』のやうに、或は他の接尾辞（かに）を付け或は他の語（ぐらひ）と合し、或は自身で重なつて語を作るものであつて、その有する意味は接頭のやうな附属的の意味ではなく、これ等の諸語の中心となる意味をあらわしてゐる。かやうなものを語根といふ。語根はそれ自身決して独立することのないものである。それが独立しない接辞や他の語根と合し、又は独立し得る語と合して、全体として一定の形をとり、独立し得べき言語単位を作るのである（註3）と。橋本氏は語根と接頭語の相違を「語根の有する意味は、接頭のやうな附属的の意味ではなく、これらの諸語の中心となる意味をあらわす」というところに認めておられる。今問題となるのは、「それ自身決して独立することのない」接頭語と全く同じ語根が、他の独立し得る語と合した場合である。例に揚げたある「ほのぐらひ」は、源氏の中には三例見られる。

○寢殿の南おもてにぞ火ほの暗う見えて

○几帳を障子口に立てて火ほのぐらきに見給へば

○まだほの暗けれど雪の光にいとど清らに若う見え給ふ

右の実例或は「ほの聞く」「ほの知る」「ほの好く」等の「ほの」は、はつきりとしてない、かすかに意を持つて、下の動詞なり形容詞なりを修飾していると思われる。二語の結合の場合その意味の軽重を云々すれば、接頭語のそれは、確かに附属的なものであろう。しかしこの事は接頭語分類(一)の場合にのみ特に云えるのではないだろうか。意義を冠する接頭語のあることが、「ほの」を接頭語とする手掛りである。意義を加えるとみる接頭語は、それら自身独立語ではないが、下語に先行することによつて修飾語となり、共に明瞭な意義を提供している。

「ほの」といつて、或は語根と呼ばれるものであつても接頭語として

の作用が充分認められると思う。そこで「ほのぐらし」の様に他の独立語と結合している場合の「ほの」は、接頭語と解してよさそうだがどうであろうか。

#### (一)、動詞転成の接頭語

「あひ・うち・かい・かき・おし・さし・たち・とり・ひき・もて」の一群に付いて諸説があるが少し揚げてみよう。

○「うち見る」「かき曇る」「とり扱ふ」等のうち・かき・とり等の如きは、それぞれ動詞であり一語であると思われぬではないが、上記のやうに用ゐられた場合のこれらのものは、すでにその本来の資格を失つている（安藤正次『国語学通考』）

○「さし出す」の類は、もと動詞の運用形から出たもので、複合構成要素との区別の困難なものもあるが、もはや具体的な意味内容をもたず、たゞ下の動詞の意味を強調するだけのものとなつている点で、接頭語と認められる。『国語学辞典』

○「接頭語もいろいろ用ゐられている中に、動詞の語気を強めるためうち・ひき・かき・もて等の語を冠せられ、これらの語は皆本来の意義を離れ、接頭語として用ゐられている（註4）

次にこれらの各々について辞典類参考文献を調査の結果、異説のあるものを揚げる

(1)、「あひ」について大言海は副詞転成の語としてゐる。このことは今は触れない。

(2)、「おし」は一般に下の動詞に押ス・カヲコメテ；スル等の意味を付け加え、又単に意味を強める接頭語とされているが、大言海は接頭語としてゐない。

(3)、「さし」は、大言海動詞としてはゐるが、接頭語化を認めてい

る。「差し懸カル」差し当ル」差し急グ」慣用シ濫用シテ意味ナク用キラル」

(4)、大日本国語辞典古語辞典は「とり」「ひき」共に接頭語化する一步手前のものとしているが接頭語とは認めていない。

以上の通りである。極く些細なことかも知れないが、こうした異説があることは複合語自体の問題と関連して来ると思われる。

だいたいこれらの一群は、動詞連用の形とされているし、動詞十動詞の複合語であつたと考へるに異論はない。そして複合語については、三つの事態が考へられる。一つは「イキシニ(生死)」の如き並列格に立つ場合であるが、これは問題でない。

ところで並列格を除いて、複合語前項・後項の關係には微妙な作用がある。この關係を諸著から二・三引用してみよう。

○「その前項は後項に対して修飾的關係に立つと云い得る。修飾語の位置に立つ前項は、形容的な意味が強く感じられ」るものであり、「複合語後項は、一般に被修飾語の位置に」立ち、前項によつてその概念内容を限定され」(註5)るのである。

○「分析すればそれぞれ独立の意味を持つてゐるけれども、分析されたものと、複合したものとは概念としては全く同じでない。決して単なる結合ではなく、これを構成する単語が合して、單一なる概念を現すもの」(註6)となる。

○「意味に於ても複合語の意味は、もとの語の意味が加はつただけではなく、それが結合して新たな意味が加はつて全体として一つの意味を表わす」(註7)

要するにその複合語の表意によつて前項・後項が並列であつたり、(一)、前項を切りはなしてみると、それが独立語の動詞として元來持ち合はせていた意義を充分に保持しながらも、前項後項として結合され

ることによつて新たな意味が加わり、全体として一まとまりの意味を表す場合があり、そして前項後項の關係は、修飾語被修飾語の關係で、換言すれば前項後項にあつて意味の重きをなすのは被修飾語としての後項であるとみる(三)の場合を考察し得る。

この複合語の仮の分類が、一般に動詞だ複合語だといわれながらも一応接頭語と考へられている「うち」・「おし」等にあてはめてみることに出来ないものかどうか、源氏中の「うち」・「おし」・「あひ」・「かい」・「かき」・「さし」・「たち」・「とり」・「ひき」・「もて」の総例を、その解釈を頼りに當つてみた結果が次表の通りである。

総數	(三)	(二)	(一)	
63	60	3	ナシ	あひうち
1366	1326	34	6	おし
205	57	74	42	かい
20	12	4	4	かき
175	96	47	33	さし
246	106	137	3	たち
346	209	48	89	とり
325	103	172	50	ひき
461	236	181	44	もて
366	233	100	33	
3543	2439	800	304	計

右表(三)の場合の用例のみを少し掲げると

- わたくしにいささかあひ。怨むる事侍りて(明石)
- うち置きうち置き押しのごひつつ(明石)
- すだれ高くおし張りて(常夏)
- かき乱るる心地したまひて(夕顔)
- 御かたちはざしはなれて見しよりも(若紫)
- あけくれたち。馴れ給へば(匂宮)

○心ことにひきつくりひけさうじ給ふ(初音)  
○儲けの君と世にもてかしつき聞ゆれど(桐壺)

これ等を解釈してみる時、「あひ」「うち」「かき」等が、動詞としての意義は全くなく、また語勢を整へると見るより以外にその術がないと考えられる。形としては動詞の複合語形であるが意義は完全に消され慣用的に下語を修飾するに及んでいる。それと共に(一)の並列の場合や(二)の場合の存在することが、異説の生じる因でもあろう。勿論(一)(二)の場合には決して接頭語ではなく、(三)のみが接頭語といわれるのではない。だがその数に於ては(一)と(二)をはるかにしのいでいる。このことは「うち」や「おし」や「たち」等が、普通接頭語として一般化されていることを肯定し得る証明ともなろうか。

以上源氏物語に於ける接頭語或はそれとおぼしきものを、主に解釈を中心に考察し、私見を述べた次第である。

註 (1)(2)〃万葉集大成(言語篇)〃—万葉集における語詞の構成

(阪倉)

(3)橋本進吉著〃國語法研究(四・語の構成要素としての語及び

接辭と語根)

(4)西村尙俊著〃源氏物語語法の研究〃

(5)〃万葉集大成(言語篇)〃—万葉集に於ける語詞の構成

(阪倉)

(6)日本文學大辭典〃語構成〃

(7)橋本進吉著〃國語法研究〃

### 昭和三十一年度講義題目

(学科目)	(担当者)	(講義内容)	(学年)
国文学作品研究	村中教授	今昔物語の研究	二
国文学作品研究	村中教授	近松の研究	三
国文学作品研究	本田教授	源氏物語講読	二
国文学作品研究	本田教授	古典の解釈	一
国文学作品研究	本田教授	八代集の研究	三
国文学特殊研究	武藤講師	現代小説の鑑賞	四
国文学特殊研究	倉野講師	古事記の研究	三・四
国文学特殊研究	武藤講師	徳富處花	三
国文学特殊研究	村中教授	西鶴の研究	四
国文学特殊研究	倉野講師	万葉集講読	三・四
国文学特殊研究	武藤講師	近世文学史	二
国語学	鶴講師	国語文法	二
国語学演習	鶴講師	文語文法	三
国語学演習	鶴講師	紫式部日記の研究	三
国語学演習	鶴講師	土佐日記の研究	三
国文学演習	本田教授		一
国文学演習	本田教授		二
国文学演習	村中教授		二
国語学概論(前期)	石坂講師		二
国語学概論(後期)	石坂講師		二
国語音韻論(後期)	村中教授		三
国語科教育法	古沢助教	文字及び言葉の一般知識	三
中国文学史	古沢助教	上代要説	一
中国文学作品研究(一)	古沢助教	附日本漢文学史	二
中国文学作品研究(二)	古沢助教	上代作品講読	二
中国文学作品研究(三)	古沢助教	国文典拠作品の研究	三